

月刊

2021

4  
月号

# みんぱく

特集

## コロナが変えた 日々を追う

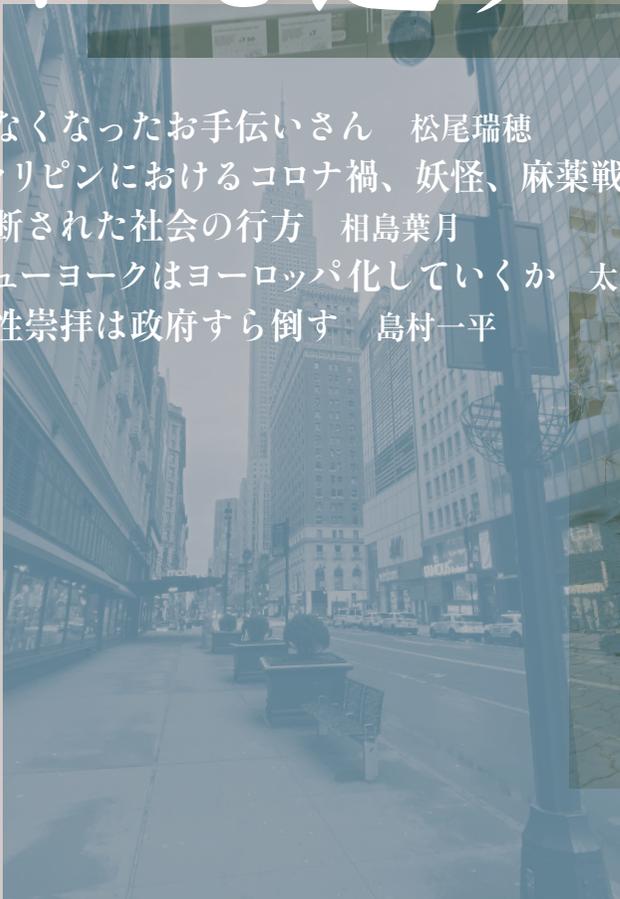
いなくなったお手伝いさん 松尾瑞穂

フィリピンにおけるコロナ禍、妖怪、麻薬戦争 日下渉

分断された社会の行方 相島葉月

ニューヨークはヨーロッパ化していくか 太田心平

母性崇拝は政府すら倒す 島村一平



# 新しい日常と新しい人間概念

おさむら 大澤 真幸

プロフィール  
1958年長野県生まれ。社会学博士。東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得満期退学。千葉大学文学部助教授、京都大学大学院人間・環境学研究科教授等を歴任。著書に、『デシヨナリズムの由来』（講談社、毎日出版文化賞）、『自由という年獄』（岩波書店、河合隼雄学芸賞）、『世界史の哲学』（講談社）、『コロナ時代の哲学』（左右社）等。

新型コロナウイルスのパンデミックが突きつけている問い、それは、私たちはほんとうの「新しい日常」へと越境できるか、である。古い、元からあった日常への復帰ではなく、日常そのものが根本から「新しい」と見なしうる状態への移行は可能か。

今、私たちは、コロナ禍はまずは健康の問題、ついで経済の問題だと思っている。しかし、もしコロナ禍が「人新世」の気候・環境変動の一環として起きたことで、今後はこれに匹敵する、いやこれ以上の破局的な事態が高い頻度で発生するようになる」とすれば、たとえば二〇〇年に一度のはずのパンデミックが一〇年に一度、数年に一度のペースで繰り返されるようになるのだとすれば、健康と豊かな経済とをともに持続的に確保することは不可能である。現在の社会構造を前提にすれば、の話だ。

そうであるとするば、コロナ禍を通じて浮上しているのは、健康や経済の問題（だけ）ではなく、政治の問題だ。ここで「政治」という語を、その最も基本的な意味で解釈しなくてはならない。政治とは、私たちの集合生活に影響を与える決定をもたらすことであり、それゆえ、究極的には、社会生活の基本的な形式や構造を発明することである。「新しい日常」は、このような意味での政治を通じてもたらされる。そして社会構造や生活形式の大きな転換は、結局、実存的な問い、「人間とは何かか

ということをめぐる哲学的な問いと結びついている。人間についての新しい概念を見出し、受け入れることができない限り、「新しい日常」をもたらしはるほどの政治的な決断をくだすことはできない。

たとえば、人と会うときにはマスクを着用すること、マスクなしで会うならできるだけオンラインにすべきだということ、こうした純粋に健康上の配慮に基づく実用的なマナーだと思われていることでも、それらが今後の日常に浸透するのだとすれば、しかもその上で、以前にもまして私たちが強い連帯と活発な交流を維持しなければならぬのだとすれば、実存的な問題と直結している。このことは、哲学者エマニュエル・レヴィナスが述べていたことを参照すれば理解できる。レヴィナスによれば、人が真に他者に出会うのは、「顔」を見ることを通じてか、あるいは「愛撫」がその極限であるような身体的な「触れ合い」を通じてである。これらがともに、「新しい日常」の中では基本的には悪いことになるのならば、今後はマスクによって顔の大半が覆われている状態で会うような他者たちとも深い信頼関係を築かなければならないとすれば、私たちは、人間の概念そのものを刷新しなくてはならない。

私たちは、「新しい日常」の真の「新しさ」を構築する困難な道に歩みを進めることができるだろうか。

## 月刊 みんなぱく

4月号目次

- |    |  |    |   |
|----|--|----|---|
| 1  | エッセイ 千字文<br>新しい日常と新しい人間概念<br>大澤 真幸                                   | 12 | みんなぱく Information   |
| 2  | 特集 コロナが変えた日々を追う<br>いなくなったお手伝いさん<br>——インドのコロナ禍が浮き彫りにする他者との共存<br>松尾 瑞穂 | 14 | 世界のバスケットリー×バスケットリーの世界<br>北はどっちだ？<br>——山と生きる箕づくり職人<br>伊藤 征一郎 |
| 4  | フィリピンにおけるコロナ禍、妖怪、麻薬戦争<br>日下 渉  | 16 | みんなぱく回遊<br>表現する衣服<br>星野 麗子                                  |
| 5  | 分断された社会の行方<br>相島 葉月  | 18 | シネ倶楽部 M<br>再生する家族の旅路<br>——「はじまりへの旅」<br>深海 菊絵                |
| 7  | ニューヨークはヨーロッパ化していくか<br>太田 心平  | 20 | ことばの迷い道<br>カタカナ語とメディア映え<br>吉岡 乾                             |
| 8  | 母性崇拜は政府すら倒す<br>——モンゴルの「対コロナ失政」と抗議デモ<br>島村 一平                         | 21 | 次号予告・編集後記   |
| 10 | 〇〇してみました世界のフィールド<br>島で芸能を見る<br>笹原 亮二                                 |    |   |

# 特集 コロナが変えた

## 日々を追う

二〇二〇年初頭から  
またたく間に世界中へ  
拡大した新型コロナウイルス  
イルズ感染症。ワクチ

ン接種が各国で始まったものの、二〇二二年三月の時点で、収束のきざしはいまだ見えない。この感染症は人びとの生活に大きな変化を強いた。例えば、企業や大学、官公庁ではリモート会議の普及が一気に進んだ。かくいう本誌の編集会議も、現在はオンラインと対面を併用して開催している。

政策を含め、人びとのコロナとの向き合い方は国や地域によって異なっている。そこには疫病に対する歴史的経験の有無や、文化的背景の

違いがある。今回、マスク着用に対する各国の対応の違いが多くのメディアで報じられた。コロナと向き合い、変化を求められることで、それまでは見えなかった文化的背景が浮き彫りになることもある。日本で書類に押印するという習慣が見直されたり、ヨーロッパで住居内での土足を問題視する家庭が増えているというのもその一例だ。

世界の人びとはどのようにコロナと向き合っているのだろう。生活はどのように変わり、そしてその背景にはどのような文化があるのだろう。本特集は、マスコミの報道だけではなかなか見えてこない各国の実情、刻一刻と変わる状況、そのひとつひとつをとらえて紹介している。過去の現象とそれに連なる現在の動向を記録に残し、これからの生活に活かすことが今、求められているのではないだろうか。本特集や本誌二〇二〇年八月号の特集「ヒトと感染症」がその一助になればと思っている。

## いなくなったお手伝いさん

### —インドのコロナ禍が浮き彫りにする他者との共存

まつお みずは  
松尾 瑞穂

民博 超域フィールド科学研究部

コロナ禍で浮き彫りになったのは、人と人との関係の境界線である。家庭内感染を防ぐため、実家への帰省をあきらめたり、訪問を取りやめたりした人も多いだろう。その一方で、介護などでどうしても一緒にいなければならないこともある。濃厚接触者にならない「家族」の外延も

伸縮している。

#### 一日の家事サイクル

インドの都市中間層にとって、生活を維持するために欠かせないのは、家事労働を担うお手伝いさんである。多くの家庭は、住み込みや通いのお

手伝いさんを雇っている。一例として、西インドの都市プネーに三世代六人で住むある家庭を紹介しよう。この家庭には二人のお手伝いさんが通ってくる。まず、朝七時にVさんが来て、台所のシンクに積み上げられた昨晩の夕食の食器を洗う。それから昼食用に野菜の副菜と主食のチャパティーを作る。なぜこんなに早いのかというところ、この家の主人が職場に弁当をもっていくので、出勤前に準備しなければならぬからだ。こうして仕事を終えると、Vさんは別の家に移っていく。彼女はこの家のほかに四軒の家を回っている。そ

して二三時半ごろ、Vさんは再びこの家に戻ってくる。朝食の食器を洗い、雇用主家族が入れたお茶を飲んでおしゃべりをして帰る。一五時ごろにもう一人のお手伝いさんであるSさんが来る。彼女は、掃除や夕食の下準備をして一時間程度で帰る……という具合である。その合間に、牛乳配達、野菜売り、ゴミ収集、クリーニング屋などが、入れ代わり立ち代わりやってくる。このように、インドの中間層の家庭では、インフォーマルセクターで働く人びとが、世帯運営の基盤となっている。

#### サイクルの崩壊

そんな生活が、コロナによるロックダウンで一転してしまった。外出禁止となり、交通が遮断されると、お手伝いさんたちがみな村に帰ってしまい、誰も来られなくなったのだ。また、家から家を渡り歩いて働くお手伝いさんや御用聞きを、感染リスクが高いと恐れ、マンション全体として訪問禁止と定めたところもあった。そうすると、困るのは雇用主である。コロナのショックは言うまでもなく、お手伝いさんが来なくなったことの生活の変化は大きかった。それは、単に家事労働が増えたというだけではない。身近な他者とのつきあいが途絶える、ということも意味している。最近では事情も変わりつつあるが、これまで多くの家庭では、特定のお手伝いさんと何年、何十年におよぶ長期的な雇用関係を結び、濃密な関係を築いてきた。彼らは、お手伝いさんの生活を支え、そして自分たちも支えられてきた。彼女たちの不在は、家庭

生活がいかに家族以外のメンバーによって成り立っているのかを、あらためて認識させることになった。

#### コロナ禍での生活の維持

コロナ禍で生活は大きく変化した。インドの都市生活ではお手伝いさんが消えたということは、その筆頭に値する出来事だった。一方で、お手伝いさんにとっては、仕事をなくすということは死活問題でもあり、感染のリスクがあっても家々を回ることを選ぶ人は多い。コロナ禍は、既存の階層差も浮き彫りにした。家族とお手伝いさん両方にとって、感染のリスクと生活の維持とのバランスは、誰とどこまで濃厚接触するのかという覚悟と信頼のあらわれでもある。



雇用主家族とおしゃべりしながらチャパティーを作るお手伝いさん(プネー、2018年)



学校は1年間ずっとオンライン授業が続いている(撮影:プラチ・ゴクテ、プネー、2021年)



性規範が強いインドでは、食料品や日用品の買い物は男性がすることが多い(ムンバイ、2019年)



高く算出した。生徒の最終学年の成績よりも、居住地や学校名に比重を置いた方程式により、既存の差別意識が露呈したのである。また、新型コロナウイルスによる健康や経済的な被害の度合いが、エスニシティによって違うことも判明した。エスニックマイノリティの方がリモートではおこなえない、つまり感染リスクの高い現場で働いているうえに、重症化した際に質の高い医療へのアクセスが難しい地域に住んでいる傾向にあることが報告されている。医療従事者に非白人の割合は高く、新型コロナウイルスで最初に亡くなった四人のイギリス人医師は、南アジアとアフリカ出身のムスリムであった。新型コロナウイルスはイギリスの社会的背景やエスニシティによる格差の存在を浮き彫りにした。

二〇二〇年三月のロックダウン以来、中流層が



2020年春のロックダウン開始直後に空となったスーパーの赤ワイン棚 (撮影：クリスチャン・ギュシェル、マンチェスター、2020年3月)

通うオーガニック食品店や魚屋では、入店者数の規制、ソーシャルディスタンス、マスク着用といった「新しい生活様式」が当たり前となっている。マスクを忘れた客には無料で使い捨てマスクを提供している店もある。一方、低所得者層の街区では、屋内であってもマスクを着用している人はめずらしい。わたしが通う南アジア食材店の店主は、自身が喘息もちであるうえに小さな店であることから、マスクを配布したり、ソーシャルディスタンスをよびかけたりしたが、協力者が少ないと嘆いていた。出身階層とエスニシティにかかわらず、マスク着用などの感染症対策を「自由主義の侵害」とみなし、協力を拒む人も登場した。感染症対策への姿勢は、社会階層とエスニシティに加えて、二〇一六年の国民投票によって生じた政治的分断を象徴しているのである。

### 栄光ある孤立？

二〇二二年一月一日にイギリスがEU単一市場



オーガニック食品店の行列 (撮影：クリスチャン・ギュシェル、マンチェスター、2020年4月)

から離脱したため、物流と人の移動が大きく制限された。イギリスはEUとの通商協定合意の公表日直前にエラスムス計画（EU圏内の大学間の留学協定）から脱退し、医師や建築士など、EU圏内で取得した専門職の資格を無効とすることを決定した。EUとイギリスの若者は、ヨーロッパとイギリスとを自由に行き来しながら学び、働く権利を失ったのである。また、「ブレクジットすれば領海内で自由に漁ができる」と目論んでいた漁師たちもいたが、そんな彼らが獲った鮮魚を積んだトラックが、国境付近で立ち往生する様子が報道された。スコットランドからデンマークに漁船で出向いて、直販を試みる漁師もいる。新型コロナウイルスの変異株の流入を防止するための水際対策とブレクジットにより、イギリスは世界中から締め出された状態にある。外国との断絶がイギリス社会の連帯感を促し、ぱっくりと割れた傷口を癒やしてくれるのだろうか。



オーガニック食品店の看板。「15～20分待ち。医療関係者と重症化リスクのある方は先頭に」 (撮影：クリスチャン・ギュシェル、マンチェスター、2020年4月)

# ニューヨークはヨーロッパ化していくか

おたしんべい  
太田心平

民博超域フィールド科学研究部

わたしは昨年二月中旬に米国ニューヨーク市へわたり、「帰国難民」になった。当地では三月に医療崩壊、都市封鎖、店内飲食の禁止がさげばれ、これらの深刻さは日本でも報道された。事実、生命維持に必要な行動、最小限の買い物、一日二度の運動を除く外出は禁止され、わたしや周囲の人

びとも生活に大きな影響を受けた。だが、生活者が見ている情勢というのは、外に伝わる悲惨な報道と、往々にして程遠いものでもある。

### 刺激的な街のおうち時間

日本でもテレワークの利点が再確認されたが、このころのニューヨークは少し別のとらえ方でそれを受け入れた。

米国は、各政党が大統領候補者を選出する時期だった。急進左派の候補が注目を集めながらも、中道穏健派のバイデン氏が民主党の大統領候補に事実上、決まった。ニューヨーク市民は民主党の支持者が多数派で、急進左派の支持層もあついが、急進左派がしばしばうたう北欧的な社会制度は、これで遠のいたかに思えた。

そこで偶然はじまったのがステイホーム政策だった。全米でも通勤時間が長いこの街の人びとは特に、家族との時間が増えた。こうして、政治経済の制度はともかく、「北欧の生活様式は、選挙で負けても、ちよつと実現したね」ということになった。

### マンハッタンを闊歩しながら

米国の多くの都市と同様、ニューヨーク市では

路上や公園などでの飲酒が終日禁止されている。夜間に路上飲酒が解禁される場合が少なくないヨーロッパとの違いだ。

経営危機に陥るや、マンハッタンのバーは、次々にもち帰りカクテルの販売をはじめた。すると、在宅勤務を終えたあと、日に一度の運動に出て、これを飲みながら帰るというのが、ちよつとヒップな夕方の過ごし方という人があらわれた。警察も大目に見ているらしく、堂々と公園で飲む人、バーの前にたむろする集団、はてはアパートの前で飲み会を催す自治会まで出てきた。「米国じゃないみたい」と、観光気分で見物する散歩者もいた。

もちろん、当局は対策に動いた。五月ごろから、アルコール類は単品でのテイクアウトを禁じると



もち帰りマルガリータ (2020年3月)



駐車レーンを使って設置された飲食店の屋外席 (撮影：Brian Keeley、2020年6月)

いうルールが徹底され、ビアガーデンや欧風の都市広場のような光景は消えていった。だが、東の間の解放区は、困難な状況下における生の記憶として人びとの心に残っているという。

テラス席への想い

路上飲酒がなりを潜めたのは、多くの飲食店が屋外席を設けたためでもあると聞く。米国の歩道は幅が狭いことが多いため、飲食店は店の前にあ

まり座席を出すことができない。土地不足のマンハッタンではなおさらで、路上にゆったりせりだしたカフェやレストランは、(厳密な起源は中東かもしれないが)「ヨーロッパのもの」とされる向きがあった。

六月末、その「ヨーロッパのもの」が出現した。

市当局が、店内飲食を禁止するかわりに、車道の駐車レーンを飲食店の屋外席とすることを認めたり、夕方にはレストラン街を歩行者天国にするな

どし始めたのだ。急場凌ぎの緩和策だが、「今後このままがいい」というのが、世論の大多数である。

面白いのは、こうした話に出てくる「北欧」や「ヨーロッパ」が、ただのイメージで、具体的な国や、実在する制度をモデルとしたものではないことだ。ニューヨーカーがこれまで漠然と願っていた想いが、ヨーロッパという偶像を介して、コロナ禍で現出しているのである。

# 母性崇拝は政府すら倒す

## ——モンゴルの「対コロナ失政」と抗議デモ

島村 一平

民博 超域フィールド科学研究部

抗議デモと内閣総辞職

二〇二二年一月二〇日、首都ウランバートル市の中心にあるスフバートル広場で政府の対コロナ失政を批判する大規模な抗議デモが起こった。日中から若者を中心に広場に人が集まり始め、日が暮れるころには、広場はマスクをした市民で埋め尽くされていた。「国家緊急事態委員会を解散せよ」「コロナにかかった人も人間だ!」「いい加減にしろ、保健大臣も首にしろ!」。思い思いのメッセージがプラカードに書かれている。マイナス二〇

度を下まわるなか、市民の熱気は、留まることを知らない。事態を重く見た国家緊急事態委員長(内閣官房長官の兼任)と保健大臣が辞任を表明。その翌日二二日にはなんとフレルスフ首相が内閣総辞職を発表するに至った。

モンゴルの対コロナ対応

どうしてモンゴルの人びとは、それほど怒ったのだろうか。そもそもモンゴル政府の対コロナ対

にモンゴル国の人口は日本の四〇分の一程度の三三〇万人である。

さらに、感染者が出たのは、二二都県のうち首都ウランバートルや農業県のセレンゲ県、グローバル企業が経営する大鉱山のある南ゴビ県といった「定住地域」の五都県に限られている(二月五日時点)ことも興味深い。やはり移動型分散居住をする遊牧社会は感染症に強いのか。

神聖なる母性

話を抗議デモの理由に戻そう。事の発端は一月一〇日の夜、コロナ感染が確認された産後間もない女性がパジャマとスリッパのみの姿で赤ちゃんを抱きしめながら救急車に乗せられ、感染症センターへと搬送されるという事件だった。

マイナス二五度を下まわる極寒のなか、無理やり救急車に乗せられている写真が一月二〇日未明、ネットやテレビで拡散されるや否や、市民の怒りは爆発した。モンゴルの人びとの目には、このような対応が神聖なる母性に対する冒瀆だと映ったからである。母性に対する冒瀆は、命に対する冒瀆につながる。

こうしたモンゴル人の母性に対する崇拝は、ポピュラー音楽からも感じられる。いかつい恰好をしたロッカーやラッパーが恥じらうことなく「お母さん、愛しています」と歌う。今回も、鋭い社会批判



ゆりかごで子どもをあやす若い遊牧民の母親(ドルノド県、2000年)



今回の政府の対応を批判したPacrapの曲、「Give Me Justice 2」のプロモーションビデオ映像。後ろに見えるのはスフバートル広場と政府宮殿(大統領府、内閣、国会の複合施設)(提供:Pacrap)

が売りのラッパー、Pacrapが抗議デモに参加した後、「厳冬のなかで出産した母親と可愛い小さな幼子を非人間的に扱って/また問題を作るのかよ」と歌い、中指を立てた。この曲のプロモーションビデオは一週間で再生回数が四〇万回に達した。母性への冒瀆が一国の首相の謝罪と内閣総辞職を引き起こす国、モンゴル。そんなお国柄に民主主義や人間性の本来あるべき姿を見出だすのはわたしだけではない。

# 島で芸能を見る

さきはら しょうじ  
笹原 亮二

民博 学術資源研究開発センター



## 島の踊りを調査にきました

佐渡島 相川の鬼太鼓 (2019年)

日本列島近海に浮かぶ島々は、周囲から隔絶されていると考えられがちだが、実際には島外との盛んな往来があり、その影響下に島独自の文化を発展させてきた。筆者がこれまでに訪れた島々の芸能について考察する。



海上から見た硫黄島。島の反対側に集落がある (2011年)



硫黄島 八朔太鼓踊りのメンドン (2010年)



日本

鉦と歌にあわせて踊る八朔太鼓踊りは、メンドンの出現を除けば同系統の太鼓踊りが全国的に見られ、それほどめずらしいものではない。集落がいくつもあるような大きな島でも同様に、同系統の芸能が島外で見られる場合が多い。島根県隠岐諸島では神楽、田楽、蓮華会舞などがおこなわれ、新潟県佐渡島では小獅子舞、大獅子、田遊び、能狂言などがおこなわれている。いずれの島の芸能も同系統のものが対岸の本州側でも見られ、島の芸能は必ずしも特異なものではないことがわかる。

しかし、島と島外の芸能のありようは共通性があるとはいえず、まったく同じではない。ボゼがあらわれる盆踊りやメンドンがあらわれる太鼓踊りは島外ではほとんど見られない。隠岐の蓮華会舞は舞楽由来ではあるが島独自の演目も加わっている。佐渡島では、島内二〇〇力所以上に分布する鬼太鼓は対岸の新潟県域では見られない。また、島内に三〇棟以上残る能舞台で地元の人びとが自ら能を演じているが、同様の演能の形式は対岸側では見られない。ほかに、俄踊りを伴う石川県能登島の獅子舞や、各集落のさまざまな踊りが一カ所に集まって演じられる鹿児島県長島のこ八日踊りは、いずれも分布がほぼ島内に限られる。このように、島の芸能は島外との共通性と島ごとの独自性を併せもっている。こうした特徴は、航路を通じた人やモノや情報の往来による島外との密接な交流交渉の一方で、四囲が海という制約から島外と隔絶が生じやす

昨年来のコロナ禍ですっかり足が遠のいたが、それまでわたしは芸能を見るために、本州、四国、九州周辺の島々を訪れてきた。各地の島は規模、島への距離、孤島や群島などありようはさまざまであるが、四囲が海で外部と隔絶している点は共通する。そのことから、島は特異な風俗習慣が残る秘境といった印象を抱きがちである。わたしが島を訪れるようになったのも、秘境ならではの特異な芸能が見られるという期待があったことは否めない。しかし、実際に島で見た芸能の様相は違っていた。戦前に薩南十島を訪れた民俗学者の早川孝太郎は「目を刮るような光景に接するだろうと予想したのは、此方の勝手な空想」にすぎず、どこも「近代風」で「特色を見出すに骨が折れる」と述べている(『早川孝太郎全集』第九巻「踊りの着物——薩南十島にて」未来社、一九七六年)。わたしの島での印象もそれに近い。島は奇異で独特な芸能が見られる秘境では必ずしもなかったのである。

### 島が育む独自性

薩南十島の悪石島では、赤と黒の縦縞の頭に大きな目や耳、口が付いたボゼが盆踊りのときにあらわれて子どもや女性を追い回す。実際に盆踊りを見ると異形のボゼは目を引くが、その出現は二〇分程で、全体的な印象は全国各地の盆踊りとそれほど違わない。悪石島の近くの硫黄島でも、赤と黒の格子縞の頭に大きな目や耳、角や瘤が付いたメンドンが、旧暦八月の八朔太鼓踊りの上演の際にあらわれて踊り手や見物人に乱暴を働く。踊り手が太鼓を叩いて



悪石島の盆踊りのボゼ (2005年)

### 自分の目で見ることの大切さ

実際に島を訪れてみると、外部との隔絶を実感することはめずらしくない。快晴なのに海が荒れて船が欠航したり、乗船したものの、翌日から海が荒れて欠航が続くというので島に下りずに港に戻ったこともあった。奄美の与論島に十五夜踊りを見に行ったときは、空路島に着くと、台風一過の島は大変なことになっていた。空港施設の損傷でわたしが乗った便以外は欠航、役場の壁に大穴が開き、ホテルの屋根は吹き飛び、停電でテレビもパソコンも使えず外部からの情報が入らない。しかし、そんななかでも島の人びとは十五夜踊りに興じていた。そのとき、わたしは島の外部と隔絶したなかでの自律的な芸能の上演を、実感をもって理解できたような気がした。

小田淳二氏は、フランスの海外県レユニオン島のクレオル性に関する自らの理解が「果てしなく広がるサトウキビ畑の緑と、そこから作り出される砂糖とラム酒の芳香という圧倒的な知覚体験から始まる」(小田淳二編訳『レユニオンの民話』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、二〇二〇年)と述べ、現地で実感することの重要性を説いているが、わたしも同感である。島に行けばすべて理解できるわけではないが、得るものは大きい。コロナ禍のなか、直接の接触なしに対象を理解する方策を探る一方で、再び直接の接触が可能になるように、その収束に向けて微力ながら自ら行動を律していこうと思う。



長島のこ八日踊り(2009年)

重要なお知らせ

新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、本館関連の催し物について、本コーナーに掲載の情報も含め、急遽、予定を変更する可能性がございます。詳細につきましては、決まり次第本館ホームページに掲載いたします。何卒ご理解のほど、お願い申し上げます。

特別展

「復興を支える地域の文化」  
3・11から10年」

2011年の東日本大震災では、復興の原動力としての「地域文化」に大きな注目が寄せられました。本展示では、東日本大震災から10年が経つ今、災害からの復興を支える地域文化をめぐる活動について、あらためて振り返ります。また、豊かな社会の礎となる地域文化の大切さとその継承について考えます。

会期 5月18日(火)まで  
会場 特別展示館

■関連イベント  
みんなく映画会  
「願ごと揺らぎ」

東日本大震災の被災地となった宮城県南三陸町の波伝谷を舞台とした映画「願ごと揺らぎ」をおして、住民をつなぐ地域文化の役割を考えます。

日時 4月10日(土)  
12時45分～16時20分(12時15分開場)  
会場 本館講堂

みんなくゼミナール

会場 本館講堂

第508回 4月17日(土)

【特別展「復興を支える地域の文化」3・11から10年】関連  
双葉町に就職して——学芸員の視点から  
講師 星洋和(双葉町役場教育総務課)  
日高真吾(本館 教授)

【申込期間】  
■一般受付 4月14日(水)まで  
※友の会先行受付は終了しました。

第509回 5月15日(土)

【特別展「復興を支える地域の文化」3・11から10年】関連  
郷土芸能の持つ力  
講師 小谷竜介(東北歴史博物館 主任研究員)  
日高真吾(本館 教授)

祭りや行事において演じられる郷土芸能は、地域の人たちを結びつける力を持っています。東日本大震災のような大きな災害時、それはどのような力を発揮したのか、事例をおして紹介します。

【申込期間】  
■友の会維持会員・正会員(電話先行予約)  
4月12日(月)～4月16日(金)  
■一般受付  
4月19日(月)～5月12日(水)

ゼミナールの参加方法

①会場での参加(定員160名)  
②オンライン(ライブ配信)での参加(定員300名)

※要事前申込、先着順、参加無料(展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です)  
※本人を含む2名まで(会場参加のみ)  
※会場参加の方には入場整理券を当日11時から2階講堂前に配布します。

【申込方法】  
■友の会維持会員・正会員(電話先行予約(定員30名))  
千里文化財団友の会事務局  
電話06-6877-8893

解説 我妻和樹(映画作家)  
司会 日高真吾(本館 教授)

■一般受付  
4月2日(金)まで  
※友の会電話先行予約は終了しました。

「明日に向かって曳け」

石川泉輪島市皆月山王祭の現在」

「明日に向かって曳け」を上映し、地域文化をどのように維持・継承していくのかという課題を参加者と共有することに、その解決手法を考えます。

日時 4月24日(土)  
13時～16時30分(12時30分開場)

会場 本館講堂  
解説 川村清志(国立歴史民俗博物館 准教授、本映画監督)  
司会 日高真吾(本館 教授)

【申込期間】  
■一般受付  
4月16日(金)まで

※友の会電話先行予約は終了しました。

研究公演

「じゃんがら念仏踊りみんなく公演」

福島県の郷土芸能で、供養の踊りでもあるじゃんがら念仏踊りの披露のほか、震災から10年間の歩みについて、演者とともに語りあいます。

日時 5月8日(土) 13時30分～16時15分  
(13時開場)

会場 本館講堂  
出演 久之浜大久(自安我楽念仏踊継承会)  
解説 遠藤諭  
(久之浜大久自安我楽念仏踊継承会)  
司会 日高真吾(本館 教授)

【申込期間】  
■友の会維持会員・正会員(電話先行予約)  
4月1日(木)～4月7日(水)  
■一般受付  
4月8日(木)～4月30日(金)

映画会と研究公演の参加方法

①会場での参加(定員160名)  
②オンライン(ライブ配信)での参加(定員300名)

※要事前申込、先着順、参加無料(会場参加の方は要展示観覧券)  
※本人を含む2名まで(会場参加のみ)  
※会場参加の方には入場整理券を当日11時から2階講堂前にて配布します。

【申込方法】

■友の会(維持会員・正会員) 電話先行予約(定員30名)  
【申込先】千里文化財団友の会事務局  
電話06-6877-8893  
(9時～17時、土日祝を除く)  
※先行予約は会場での参加が対象です。

■一般受付

オンライン予約  
みんなくホームページのイベント予約サイトよりお申し込みください。  
メール・電話予約(会場参加のみ)

【申込先】  
千里文化財団イベント予約受付  
メール yoyaku-event@minpaku.ac.jp  
電話 06-6877-8893  
(9時～16時、土日祝を除く)

特別展及び博物館 展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業関連シンポジウム

「多角的な視点から捉える地域の文化」  
博物館における研究の可視化・高度化  
災害からの復興を支える地域文化をめぐる最先端の研究成果を報告し、それをいかに可視化・高度化するのを考えます。

日時 5月2日(日) 13時～16時40分  
(12時30分開場)  
会場 本館講堂

(9時～17時、土日祝を除く)  
※先行予約は会場での参加が対象です。

■一般受付

オンライン予約  
みんなくホームページのイベント予約サイトよりお申し込みください。  
当日参加申込(会場参加のみ、定員30名)  
11時から2階講堂前にて受け付けます。

みんなくウィークエンド・サロン  
研究者と話そう

会場 第5セミナー室

※申込不要(当日先着順、定員各日42名、参加無料(要展示観覧券))

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域/国の最新情報」「みんなくの展示資料」について分かりやすくお話しします。

4月4日(日) 14時30分～15時15分(14時開場)  
江戶將軍家が愛用した十日町の越後縮  
古文書の解読と光学撮影調査  
話者 高橋由美子(十日町市博物館 学芸員)  
末森薫(本館 助教)

4月11日(日) 14時30分～15時(14時開場)  
寺社・石碑データベースの可能性  
話者 寺村裕史(本館 准教授)



刊行物紹介

■川瀬 慈 著  
『叡智の鳥』  
インスクリプト 1,760円(税込)

アジスアベバ、伊江島、読谷村、直島、吹田、フランクフルト、マンチェスター、ストリートから、街の片隅から、森の奥から、悲惨を刻む世界の底から、言葉が、祈りが立ち上がる。映像人類学者による詩・随筆集。

友の会

国立民族学博物館友の会 電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716  
https://www.senri-f.or.jp/minpaku\_associates/ E-mail minpaku@senri-f.or.jp

友の会講演会

友の会会員に限定して開催します(要事前申込、先着順、受付フォームは友の会ホームページ内にあります)。

友の会講演会の参加方法

①本館第5セミナー室での参加(定員40名)  
②オンライン(ライブ配信)での参加(定員100名)  
第511回 4月3日(土) 13時30分～14時40分  
「食」を学問にする

講師 朝倉敏夫(本館 名誉教授)

半世紀前、石毛直道は「食は文化である」と提唱し、食の総合的研究をすすめました。いまではそれが、大学などで学ばれる学問分野に成長しました。「食を学問とする道の展開をみんなく中心にたどりま。

※受付フォーム https://www.senri-f.or.jp/511tomo/  
第512回 5月1日(土) 13時30分～14時40分  
アジア鍵盤楽器考

講師 岡田恵美(本館 准教授)

1842年にフランスで発明された鍵盤楽器ハルモニウム。その後、西欧では圧縮型(ふいご)のハルモニウム産業が、米国やアジアでは吸入型(リード)オルガン産業が興隆しました。本講演では、19世紀後半以降の日本のリードオルガン産業とインドのハルモニウム産業に着目し、楽器改良や楽器の受容に伴う音楽文化の再編について考察します。

※受付フォーム https://www.senri-f.or.jp/512tomo/

みんなく友の会オンラインレクチャー

友の会ホームページでミニレクチャー動画を公開中です。

なぜ古代文明の建物は大きいのか  
南米アンデス文明からの視点

講師 関雄二(本館 副館長)

世界の古代文明に共通するのは、巨大な建物、いわゆるモニュメントを築いたことです。その理由、そして大きくなったことにより、社会がどのように変貌したかについて、南米アンデス文明を例に解説したいと思います。

※公開ページ https://www.senri-f.or.jp/tomomovie004/

国立民族学博物館友の会は、千里文化財団が運営しております。2021年4月、千里文化財団は公益財団法人に移行いたしました。

登壇者

小池淳(国立歴史民俗博物館 教授)  
西村慎太郎(国文学研究資料館 准教授)  
木部暢子(国立国語研究所 教授)  
吉田丈人(総合地球環境学研究所・東京大学大学院総合文化研究科 准教授)  
川村清志(国立歴史民俗博物館 准教授)  
劉建輝(国際日本文化研究センター 教授)  
渡辺浩(国文学研究資料館 教授)  
日高真吾(本館 教授)

シンポジウムの参加方法

①会場での参加(定員160名)  
②オンライン(ライブ配信)での参加  
※要事前申込、先着順、参加無料  
※本人を含む2名まで(会場参加のみ)  
※会場参加の方には入場整理券を当日11時から2階講堂前にて配布します。

【申込方法】

申込期間  
4月2日(金)～4月28日(水) 16時  
オンライン予約  
みんなくホームページのイベント予約サイトよりお申し込みください。

メール・電話予約(会場参加のみ)  
【申込先】  
千里文化財団イベント予約受付  
メール yoyaku-event@minpaku.ac.jp  
電話 06-6877-8893  
(9時～16時、土日祝を除く)

みんなく無料シャトルバスのご案内

大阪モノレール「万博記念公園駅」とみんなくとの間の直通送迎バスを特別展復興を支える地域の文化」の会期中に運行します。

※急遽予定を変更する場合があります。  
※新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、座席数などが従来との運行と異なります。

※各イベントについてくわしくは、みんなくホームページをご覧ください。



# 世界の バスケットリー × バスケットリーの 世界

世界のかごを販売する

東京都国立市に「世界のかごカゴアミドリ」という店を構えて二〇年が経過した。  
日本国内、そして世界各地の伝統的なかごを販売するにあたっては、できる限りつくり手のもとに足を運び、材料となる植物を採取する作業も見



30年以上前の真を手にする田口さん。工房にて（秋田市、2018年）

## 北はどっちだ？

### 山と生きる箕づくり職人

バスケットリーは、その技術やデザインに目をうばわれがちだが、つくり手たちの自然に対する深い知識と経験、何より自然を慈しむ気持ち、手仕事の技を支えている。今月は、世界のかごを取り扱う専門店の営みをおして、自然とともに生きる職人の姿を紹介する。

伊藤 征一郎 世界のかごカゴアミドリ店主

学させてもらうようにしている。かごづくりでは、編む作業は全体の二、三割程度を占めるにすぎず、質の良い材料を選び、保管、加工するまでの下準備が、何よりも仕上がりを大きく左右するからだ。店では数カ月に一度、つくり手を招いて作品を紹介する企画展を開催している。ペタラン職人の手業を間近に見る機会は少なくなってきた。何より自分がたのしみでもあるからだ。二〇一九年には、箕をテーマにした実演販売会をおこなった。

#### 山を知り尽くした人

「こつちが北だよな？」

秋田の箕づくり職人、田口召平さんを店にお招きしたときのこと。東京駅まで迎えに行き、地下鉄の駅から地上に出たとき、最初に聞かれたのは方角だった。ビルに囲まれた交差点の傍らで、スマートフォンコンパスを使って返答した。その後も何度か、別の場所と同じ質問を受けた。



全身を使って箕の本体を編みこんでいく田口さん（秋田市、2018年）

田口さんは昭和二二（一九三七）年生まれ。秋田市太平黒沢地区に伝わる太平箕の最後の職人である。明治から箕づくりを生業とする職人の四代目として現在も活躍している。太平箕は、軽くしなやかで、馬が乗っても壊れないといわれるほどの丈夫さも備えている。材料となるイタヤカエデの白くうつくしい色合いも特徴のひとつ。田口さんに七〇年近く積み重ねてきた技を披露してもらったため、当店に数日のあいだ滞在してもらった。

箕は、穀物などの運搬やふるいに使うため、しなやかさと耐久性が重視された道具である。どの地域の箕も、性質の異なる複数の種類の植物を組み合わせてつくられているのは、そのための工夫だ。箕づくりの仕事には、優れた製作技術だけではなく、ひとつひとつの素材を最良の状態で採取するための、山の知識と経験が必要不可欠である。

太平箕の基本的な素材は、イタヤカエデ、フジ、ネマガリダケの三種類。フジは、コブシの白い花が咲く春先から、桜の花が見ごろを迎えるまでに採取する。田植えが終わるとネマガリダケを刈り、稲刈りが終わってから山に入ってイタヤカエデの若木を切る。しかし、箕の本体に使用する、もつとも重要なイタヤカエデが採取できず、ウルシやヤナギの仲間



秋田市近郊の山に入り、イタヤカエデの若木を切る（2018年）

などで代用しなければならぬ時期もあったと聞いた。そんなときに備えて、職人たちは、さまざまな植物の生育場所を記憶し、それぞれの特性も手指の感覚に刻みこんでおく必要があるのだという。

わたしはこれまでに、何度か山を案内してもらったが、田口さんは山歩きの最中だけでなく、行きかえりの車中さえも、山の様子が気にかかって仕方がないようだった。何度も車を止めて、山のなかを確認しながら目的地向かうのだ。

「森のなか霧に包まれても、樹皮の表情や枝の付き方を観察すれば、方角がわかるからだいじょうぶ」

「初夏になれば、イタヤカエデの木は車に乗っていないながらも見つけられる。葉っぱの縁がうっすら赤みを帯びるから。それよりも、今日はやく

取材を切り上げて、山菜をとりいれないか」

身近な植物をうまく利用して生きてきた先達の知恵。わたしにとって、田口さんはまさにこのことを象徴する存在だ。

「こつちが北だよな」という質問も、進む方向を確認したかったわけではなく、山と深くかわって生きてきた人ゆえの、方角がわからないこと、居心地の悪さ、自分がいる位置を常に把握しておくという、体にしみこんだリスク回避の習慣によるものだったのだろうと思う。

#### 頼もしい存在

出会って以来、田口さんとは毎年顔を合わせてきたが、この一年ははじめて一度も直接会うことができなかった。

新型コロナウイルスへの不安は尽きないが、離れているからこそ、気づかされることも多々あった。自然を相手に、巡り来る季節に忙しく向き合い、変わらず、身体を動かし続けている職人たちの存在を、これまで以上に頼もしく感じる一年だった。

田口さんとは、まだまだ一緒に山で時間を過ごしたいし、聞きたいことがたくさんある。うつくしい箕づくりの技術だけでなく、山を文字どおり「宝の山」としてとらえ、自然の恵みを生かす術を追求してきた深い知識と経験を、もつと多くの人に伝えていきたいからだ。そしていつかまた東京に来てもらうときには、北はどっちだ、と聞かれるのを楽しみにしている。

## 表現する衣服

総合研究大学院大学博士後期課程 星野 麗子 ほしの れいこ

に、民族衣装を着用する人は減少してしまっただけで、民族衣装の出身者なわけではなく、観光の現場においても、民族衣装を積極的に着用する人が増えている。それは、自らが帰属する集団へのアイデンティティを表現するとともに、中国の多様な民族が、言語や習慣の差異を越えて共生していることを、国内外からやってくる観光客に対して、強調するためでもある。

### 越境する衣服

東南アジア展示場には、「バティック」の名で知られるインドネシアのロウケツ染めの綿布を用いた婚礼衣装が展示されている。伝統的なバティックは、銅板製の道具を使って布の両面に口ウ置きをし、染色することで模様をあらわす。インドネシアのバティックは、二〇〇九年、ユネスコの無形文化遺産に登録された。

一方、興味深いことに、ロウケツ染めの綿布を用いた衣服は、アフリカ展示場でも見ることができる。西アフリカ諸国を中心に、インドネシアのバティックの技術を導入し、「アフリカらしい」図柄をプリントした布が日常着の生地として定着している。発端は、インドネシアとアフリカが、ヨーロッパ諸国の植民地だった時代にまでさか

### 中央・北アジア展示 「社会主義の時代」セクション



左：女子学生用制服 (モンゴル、H0277342ほか)  
右：女子学生用制服 (カザフスタン、H0277670ほか)

### 中国地域の文化展示 「装い」/「継承される伝統中国」セクション



左：女性用婚礼衣装 (中国、H0269282ほか)  
右：男性用婚礼衣装 (中国、H0269288ほか)



ペー (白) 族衣装 (老年女性用盛装) (中国、H0237595ほか)  
ほか

### 東南アジア展示 「村の日常」セクション



左：男性用婚礼衣装 (インドネシア、H0202287ほか)  
右：女性用婚礼衣装 (インドネシア、H0202306ほか)

### アフリカ展示 「装う」セクション



女性用衣服 (カメルーン、H0236195ほか)  
ほか

のぼる。一九世紀中ごろ、ヨーロッパ諸国がバティックの技術を工業生産に利用し、アフリカ各地の伝統的な図柄をプリントした布を、アフリカに向けて輸出したのが始まりだといふ。創られた「アフリカ的」なもの、アフリカのなものととしてアフリカ内外に広まり、最近では日本でも好んで着る人が出てきたといふ。

衣服の生地を向けると、インドネシアとヨーロッパ、アフリカの歴史的な繋が



制服を着用して仕事をする中国四川省の観光ガイド (2017年)

衣服には、身体をかくしたり、体温を調節したりするほか、着る人の立場や所属を示すなどの役割がある。大きく分けると、儀礼やイベントなど特別なときに着用する衣服と、日常的に着用する衣服がある。その形態は各地域の気候や文化、用途によって異なり、一枚布を身につける民族がある一方で、布を体型に合わせて複数の異なる形に裁断し、それらを縫い合わせて成形する人びともいる。素材も地域の自然環境によってさまざまである。今回は衣服そのものが着る人や見る人に与える効果や情報に注目して展示場を歩いてみることにした。

### アイデンティティを表現する

中国には多数派の漢族のほか、公認されている五五の少数民族がいる。中国地域の文化展示場には漢族の婚礼衣装のほか、ミャオ族やチャン族、ペー族など少数民族の衣服が展示されている。これらの衣服には、織りや刺繍、色合いや形状に、文化的な特徴があらわれている。中国では、改革開放以降の一九七〇年代後半から徐々に、文化政策の一環として、個々の民族に特徴的な文化を資源としてとらえるようになった。その際、衣服は、自らが帰属する集団を他者に積極的に示すためのツールとなった。現在は、生産性や日常生活における利便性が優先され、中国においても、日常的

りや、地球規模での技術の越境を発見することができる。なお、バティックという名称は、今日、「ロウケツ染め」を意味する共通語として広く世界で使用されている。

### 自覚をうながす衣服

制服もまた独特な効果を生み出している。たとえばひとつには同じ職種であることを視覚的に表現し、見る人にある種の憧れや尊敬の気持ちを抱かせる。また着用する人の自覚をうながし、同じ目的をもつ者同士の団結心を高めるなどの効果もある。わたしが調査している中国四川省の観光地では、ガイドが制服を着ることで、仕事に対する自尊心をもったり、あるいは職場への所属を再確認したりする様子が見受けられた。

中央・北アジア展示場には、社会主義時代の女子学生用制服が展示されている。同じ服を着ること、またその行為を他者に対して視覚的に示すことで、社会主義における理想を共有するためのイデオロギーを表象しているのだといふ。

展示場では世界各地の衣服のデザインに目を奪われがちだが、その背景に目を向けると、衣服がもつ集団や文化などへの自己同一化の側面や他者との差異化の効果、地域間の歴史的な関係性などが見えてきて面白い。



再生する家族の旅路

深海菊絵  
民博 外来研究員

現代アメリカ社会に抗い、森で暮らす

本作は、アメリカ北西部の隔絶された森のなかで暮らしていた家族が、自分とは異なる価値観との出会いを通じて再生していく旅路を描いた作品である。全米四館での公開からスタートした自主制作映画で、話題をよんで約六〇〇館にまで拡大し、カンヌ国際映画祭の「ある視点」部門監督賞を筆頭に世界各国の映画祭で数々の賞を獲得している。

主人公となるのは、ベンと六人の子どもからなるキャッシュ一家。彼らは火を起し、作物を作り、狩りをし、身体を鍛え、瞑想し、夜には焚き火を囲んで読書し、音楽を奏でるといった生活を送っている。子どもたちはベンの独自の教育によって自力で生きるためのサバイバル能力や六カ国語を操るほどの高い学力を身につけ、自分の権利を知ることや自己主張の大切さを学んでいる。一家の合言葉は「人民にパワーを、権力にはノーを」。一家は人権拡大の促進に貢献した人物として言語哲学者ノーム・チョムスキーを崇拜している。

こうしたキャッシュ一家の生き方は対抗文化を想起させる。対抗文化とは主流社会の価値や規範に対する反発から生まれた文化であり、アメリカにおいては一九六〇年代にベトナム戦争を背景として隆盛を極めた。

る価値観をもった他者と出会う。例えば、ベンの妹家族である。夕食の席で子どもにレスリーの死因を尋ねられた妹夫婦は「病気で亡くなった」と伝えるが、ベンは「自殺した」と言い直す。「子どもには理解できない」と話題を遠ざけることで子どもを守ろうとする妹夫婦と、自殺やドラッグ、セックスであろうと子ども

に聞かれれば詳細に事実を伝える方針のベンは衝突する。また、保守的なレスリーの父とベんと確執は、より深刻である。レスリーの父はベンを「ピエロ姿のヒッピー」と詰り、ベンの生き方や教育方針を認めない。

また、家族のなかにも軋轢が生じる。例えば、父の方針に疑問を抱いた次男は「パパは危険だ」と反抗し、家族のもとを離れる。こうした次男の態度は皮肉にも、権威に抗い自己主張せよというベンの教育が功を奏していることを示している。

あらたな世界へと動き出す

作品前半においてベンは強靱で完璧な人物として描かれているが、後半になるとその印象は変化していく。ある出来事をきっかけに、自分が子どものために選択してきたことは本当に正しかったのだろうか、



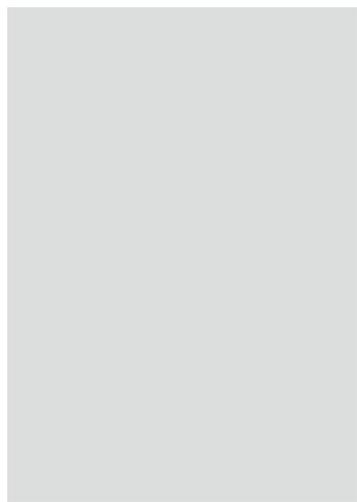
ロケ地となったワシントン州の森。ベンたちはベーカー山麓で暮らしていた  
©U.S. Forest Service- Pacific Northwest Region/flickr, 2012

対抗文化の一翼を担ったのは権威主義や物質主義を拒絶し、反戦や自由を掲げていたヒッピーである。長髪に顎髭を生やしたベンの風貌、

自然と共生する暮らし、キリスト教や資本主義の否定など、キャッシュ一家は多くの点でヒッピーと重なる。しかし、一家がストイックに自己を鍛錬する姿は、禁欲主義的なプロテスタントの生き方にも通じる点がある。そのような意味で、一家にはアメリカ人の相反する複数の特徴が混在しているといえる。

価値の対立

入院していた妻レスリーが亡くなると、ベンは遺言に書かれた妻の願いを叶えるために子どもたちと下山を決意する。その旅路において一家は、自分とは異なる



DVD『はじまりへの旅』 発売・販売元：松竹  
©2016 CAPTAIN FANTASTIC PRODUCTIONS, LLC ALL RIGHTS RESERVED.

とベンは葛藤する。自分の弱さを開示した父に対して、子どもたちが贈ったのはチョムスキーのことばだった。「希望はないと思うと確実になくなる。自由への衝動と物事を変えるチャンスを感じたら世界をよくできるかもしれない」。このことばは、希望や信念をもつことの大切さをわたしたちに思い出させる。だが、ベんと子どもたちのやりとりのなかにこのことばを置き直すと、自分の力だけではなく、自分が不完全であることや他者に支えられた存在であることを認めることもまた、より良い世界へと向かう原動力となる、とも聴こえる。

エンディングでは一家の新しい日常が映し出される。それはベンが単に社会に迎合したというわけではなく、子どもたちと自分のために、自分を変化させる勇気をもったことではじまった世界である。一家が辿った旅路は、鑑賞者各々の価値観を揺さぶりながら、日常や社会をより豊かに創造するための手がかりを与えてくれる。

この写真はウェブサイトでは非掲載にしています

マラソンやロッククライミングなど、自然のなかで身体を鍛えるベンと子どもたち  
©2016 CAPTAIN FANTASTIC PRODUCTIONS, LLC ALL RIGHTS RESERVED.

# ことばの迷い道

## カタカナ語とメディア映え

よしおかのぼる  
吉岡 乾

民博 人類基礎理論研究部

ソーシャル・ディスタンス、ステイ・ホーム、G0  
o1キャンペーン——。

日本では二〇二〇年の頭ごろから始まった新型コロナウィルス (SARS-CoV-2) 関連の騒ぎで、政治家たちが次々と標語や施策に、文法的に間違ったりしつつ英語をカタカナ語化した表現を盛り込んでいくのが目に付く。

彼らが想定している受け手は、専ら、日本語のわかる日本人だろう。何せ、国内に暮らす海外出身の人びと、日本語運用能力に長けていない人びとは、彼らの打ち出す政策や発言の射程から、ほとんど常に漏れ落ちていくのだから。困窮した生活のなか、生きるのに必要な情報は日本語でばかり発信され、言語の壁のあちら側に置かれてしまっている迷える彼らに届いているなどは、断じて言えない。そういった人びとを救うはずの、平たい日本語の表現による発信も、またこなれておらず、ただ単に漢字をひらがなに直したただけだったりする粗末なものがない。なくない。

想定ターゲットが日本語話者限定のマスコミ好き政治家たちは、それなのになぜか、なんちゃって英語を使ってアピールしたがる。いわゆる第三波、二〇二〇年秋以降の感染拡大に先立ち、「トリアージ (患者選別) を積極的におこなう」などと妄言を吐いた某府知事もあったが、果たしてちゃんと意味がわかってカタカナ語を高言しているのだろうか。

格好つけている場合ではない。やっている感を演出するためにメディア露出を増やしている傍らで、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) や貧困によって実際に、市民は次々に亡くなっているのだ。

パンデミック、クラスター、リモート・ワーク——。日本は言語多様性の小さい国だ。教育普及率も高いので、少なくとも、ほとんどの政治家が視野に入れている対象のほぼすべてが、日本語を用いることで話を聞かせられる人びとだと考えられる。

それなのに、メディアに出たがる種類の為政者たちは、何かを説明するとき、社会へ新規に導入する概念をカタカナ語で語る。当然、多くの市民が面喰らう。大して訳しにくい概念でもないはずなのに、どうしてそういう真似をするのか。

お困いの専門家が専門用語を訳さないで使うのでも、見習ったのだろうか。近年の研究者らが専門用語を訳そうとしないスタンスも、個人的にはどうかと思う。だが彼らは基本的に、身内同士、互いにその用語を知っている前提で話をしているのだから、問題は少ない。一方で政治家は市民のために働く者である。それなのに市民に「わからない話」をして、仕事をした気になってもらっては困る。思えば、説明になっていない説明をして説明をしたこととするやり口が、昨今の日本の政治では多用され、一般的になってしまっている。結局は、ポーズを取れば良いという心づもりと姿勢なのだろう。

伝わり易さは二の次で、メディア映え優先。それでも世論調査で好評を得ていたりして、市民の判断力もどうかしている。正気を奮い立たせてほしい。

昨年末には近所のスーパーマーケットでも、ピクトグラムの下に「KEEP DISTANCE」とだけ書かれたオシャレっぽい掲示が出た。この界限かいがいに、日本語がわからず英語ならわかるという者が、そう多く住んでいるとも思えないのに。

編集後記

コロナ以前、マスクをする習慣がなく、街中でマスクをしている人がほぼ皆無だった欧米諸国と、風邪や花粉症でマスクをして出歩く人を見慣れていた日本。知らない人と目が合うと、「ハイ（やあ）」と言わずにはいられない国民と、何も言わずに目をそらす国民。人前で<sup>めいてい</sup>酩酊をさらすことに寛容な国とそうでない国……等々。そもそも文化によって家族、隣人、他者を含む人間観や公共概念が違うのだから、コロナ後の生活への影響や対応が違ってくるのも当然だ。本号の特集「コロナが変えた日々を追う」では、報道ではあまり目にすることがない、各国の生身の人びとの生活が紹介される。お手伝いさん、妖怪、階層やエスニシティ、屋外飲酒、母性崇拜と、どれもコロナが浮き彫りにした文化の基層とよぶうもので、まさに「真実は細部に宿る」だ。翻って日本で<sup>あらわ</sup>露になったものは何だろう。世間の目と同調圧力だけだとしたら、あまりに<sup>むな</sup>虚しい。だが、そうした圧力が注目されるのは、多様な考えや生き方をする人が増えてきたことの裏返しともいえるだろう。(南真木人)

みんぱくをもっと楽しみたい方のために  
**国立民族学博物館友の会のご案内**

友の会は、みんぱくの活動を支援し、博物館を楽しく積極的に活用するためにつくられました。毎月『月刊みんぱく』をお届けするほか、さまざまなサービスをご用意しております。

維持会員・正会員

『月刊みんぱく』の送付／友の会機関誌『季刊民族学』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加／研究者同行の国内外研修旅行への参加 など

ミュージアム会員

『月刊みんぱく』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加 など

繰り返し入館できる**みんぱくフリーパス**や、学校・学部単位で利用できる**キャンパスメンバーズ**など各種会員種別もご紹介します。目的にあわせてご利用ください。

詳細は、公益財団法人千里文化財団までお問い合わせください。  
(電話 06-6877-8893 / 平日9:00～17:00)



●表紙

- 右上：オンライン授業を受ける女子学生  
(撮影：ブラチ・ゴクテ、インド、2021年)
- 右下：ムンバイの路上生活者  
(撮影：松尾瑞穂、インド、2019年)
- 左上：2020年春のロックダウン開始直後に空となったスーパーの赤ワイン棚  
(撮影：クリスチャン・ギュシエル、イギリス、2020年)
- 左下：都市封鎖の開始直後、静まりかえった午後5時のマンハッタン  
(撮影：太田心平、アメリカ、2020年)

次号の予告

特集

「島世界の弔い」(仮)

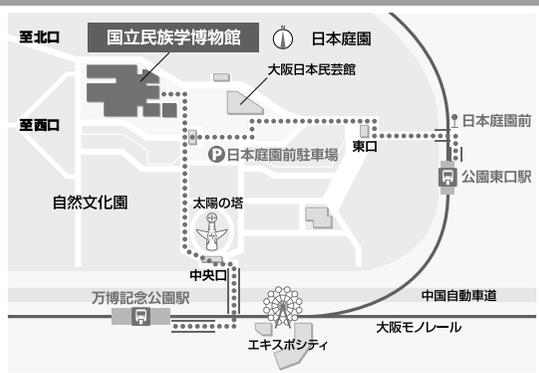
月刊みんぱく 2021年4月号

第45巻第4号通巻第523号 2021年4月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 **国立民族学博物館**  
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1  
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子  
編集委員 南真木人(編集長) 上羽陽子 齋藤晃  
菅瀬晶子 三島禎子 吉岡乾  
デザイン 宮谷一 長岡綾子  
制作・協力 公益財団法人千里文化財団  
印刷 株式会社 遊文舎

\*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。  
\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

みんぱくフェイスブック  
みんぱくツイッター  
みんぱくインスタグラム  
みんぱくYouTube

<https://www.minpaku.ac.jp/>

<https://www.facebook.com/MINPAKU.official>

<https://twitter.com/MINPAKUofficial>

<https://www.instagram.com/MINPAKUofficial/>

<https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial>



# みんなのほくぶつかん みんぱく

MINPAKU

みんぱくミュージアム・ショップよりご案内

## 東北地方の品々を集めました!

2011年の東日本大震災では、復興の原動力として「地域文化」に大きな注目が寄せられました。ミュージアム・ショップでは、開催中の特別展にあわせて、東北地方で作られた品々を集めました。



### 赤べこ、こけし

赤べこ 734円～  
こけし 1,466円～  
ろくろ挽きの技がいきる  
こけし、首をふる姿が愛  
らしい赤べこは、東北地  
方を代表する郷土玩具。



### 気仙沼の帆布製品

右: カフェエロン  
4,180円  
左: 一本柄トートバッグ  
3,850円

震災後、伝統の継承と  
雇用創出のために誕生  
した気仙沼の帆布製品  
です。伝統技法「硫化  
染め」を採用し、職人  
が一点一点手作りして  
います。

### 絵ろうそく 手描きろうそく

左: 手描きろうそく 457円  
右: 絵ろうそく 1,133円

500年の歴史を誇る会津の和ろうそく。伝統的な和ろうそくのほか、絵付けの技術を生かした手描きろうそくもご用意しております。



特別展開催中!

## 復興を支える 地域の文化

— 3.11から10年

会期: 2021年5月18日(火)まで  
会場: 特別展示館

特別展図録(1,980円)も販売中!



\*価格はすべて税込です。

お問い合わせ

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ

email: shop@senri-f.or.jp

図録はオンライン・ショップ「world wide bazaar」でも取り扱っております。 <https://www.senri-f.or.jp/shop>